

近代三八・上北地区における異文化との遭遇・接触の意義についての考察―地域産業と関連づけて

岩見 一郎¹

要 旨

本論では、近代黎明期に青森県三八・上北地区で行われた異文化との遭遇・接触の重要性について考察する。この出来事を中心は広沢安任という人物である。広沢は、元会津藩士で、戊辰戦争後に新しく成立した斗南藩の少参事を務めたが、2人の英国人を雇い入れて旧百石村（現三沢市）谷地頭で日本初の民間洋式牧場を開設した。広沢の取り組みは、一つには旧藩士たちの授産・生活安定のためであり、肉牛飼育は、将来、牛肉や牛乳が日本人の食生活に欠かせないものとなるとの判断からだったと言われる。そして、牛肉・牛乳の普及をめざして、牛の品種改良や農耕具の開発改良を行い、さらに東京・新宿に第二牧場を開設し、牛乳の販売所まで作ってしまう。

明治初期に地方に暮らす人々の常識を覆すような、広沢の斬新な発想力と行動力が生んだ偉業の歴史的な重要性の一つは、この時代に北東北の地で我が国初の西洋式の牧畜・畜産業を開始し、その分野に詳しい英語ネイティブ・スピーカーを自発的に雇用し、農具等を海外から直接輸入したり、地元の刀工とのコラボレーションで製作したりしたことである。広沢の足跡について学ぶことは、大変意義のある歴史学習になると思われる。今のこのような時代に、地方で暮らす者にとって、郷土の歴史を見直し、先人の志に触れることから、未来へのよりよい生き方へのヒントが得られるかもしれないのである。

キーワード：異文化との遭遇・接触、洋式牧場、近代、青森県、三八・上北地区

¹ 感性デザイン学科・基礎教育研究センター・教授

The Significance of a Cross-cultural Encounter-and-Contact Incident in Sampachi and Kamikita Districts during the Modern Period

Ichiro IWAMI

ABSTRACT

This paper discusses the significance of one of the major cross-cultural encounter-and-contact incidents which occurred in Sampachi and Kamikita Districts in Aomori Prefecture during the modern period. The thesis of the work focuses on a frontrunner named Hirosawa Yasuto, who originally came from the Aizu Clan in Fukushima and became a junior councilor of a newly established clan, the Tonami Clan, in Aomori. Hirosawa and his colleagues including two British men established a Western-style ranch in Yachigashira, the old Momoishi Village (present-day Misawa City). Hirosawa's endeavor was based on his desire to save the retainers of the Aizu Clan who suffered from extreme poverty since the reduction and transfer of the Aizu Clan to the wasteland of Tonami. One of the historical significances of this cross-cultural encounter-and-contact incident would be the initiation of the cattle industry in the eastern parts of Aomori Prefecture and the introduction of western-style agricultural devices along with the voluntary employment of native speakers of English in the early Meiji Period. Hirosawa's footprint could be regarded as a great case for us to learn from the past to better our future.

Key Words: *Cross-cultural encounter and contact, Western-style ranch, Aomori Prefecture, Sampachi and Kamikita Districts*

1. はじめに

本論では、近代黎明期の青森県三八・上北地区における異文化、特に英語圏の文化との遭遇・接触を取り上げて、その意義について地域産業と関連づけて考察する。明治初期に県南地方で英語圏の文化とどのような遭遇・接触があり、それが地域産業にどのような影響をもたらしたと考えられるのか。本県の近代史をこのような視点から振り返ることは、地域の産業・文化の歴史を知る上では重要な切り口であり、地域理解に繋がることを期待したい。

2. 近代三八・上北地区の異文化との遭遇・接触の動き

ここでは、明治初期における三八・上北地区での英語圏の文化との遭遇・接触を紹介するとともに、その歴史的な背景について記す。

1872（明治5）年、旧百石村（現三沢市）谷地頭に日本初の民間洋式牧場「開牧社」（後の広沢（廣澤）牧場）が開設された。その中心となったのが、斗南藩で少参事として活躍していた広沢（廣澤）安任（1830（天保元）～1891（明治24））であった。広沢は元々会津藩士で、1862（文久2）年に藩主・松平容保が政情不安定な京都を鎮護するために幕府から京都守護職に命ぜられた際に側近として上洛するなど、藩の要職を務めた人物である。会津藩は、その後、幕末の動乱に巻き込まれ、戊辰戦争では倒幕派に敗れて朝敵・逆賊とされ、苦難の道を歩む。そして敗戦後、旧会津藩が移封されたのが陸奥国北郡（下北地区と上北地区の一部）、三戸郡（三戸・五戸地区）、二戸郡の一部（二戸市金田一以北）であった。

広沢は、会津藩再興を願い、陸奥国への移住を推進し、1869（明治2）年に斗南藩が成立する。しかし、厳寒の地で旧会津藩の人々に強いられた生活は凄惨なもので、その困窮ぶりは石光真人編著『ある明治人の記録―会津人柴五郎の遺書』でも窺い知ることができる。そして1871（明治4）年、廃藩置県の詔が全国に発せられ、藩制の廃絶によって斗南藩は斗南県となり、会津藩再興の夢も絶たれてしまう。こうした政治的変革の中、広沢は、旧八戸藩大参事の太田広城とともに、津軽、南部に誕生していた複数の県を合併した弘前県（後の青森県）成立に尽力する。八戸市史編纂委員会による『新編八戸市史通史編Ⅲ近現代』（2014）には以下の記載がある。

広沢と太田は維新の大変革にあって、経済基盤の弱い下北・南部地方と農業基盤の安定した津軽地方との合併を考えた。二人は連名で五県（弘前^{ひろさき}県、黒石^{くろいし}県、斗南^{しちのへ}県、七戸^{しちのへ}県、八戸^{はちのへ}県）の合併を新政府に建言した。（pp.67-68）

また翌1872（明治5）年には、谷地頭に我が国初の民間洋式牧場を開設し、肉牛の飼育に取り組む。牧場開設は、一つには、旧藩士たちの授産・生活安定のためであり、肉牛飼育は、将来、牛肉や牛乳が日本人の食生活に欠かせないものになるとの判断からだったと言われる。そして、牛肉・牛乳の普及をめざし、牛の品種改良や農耕具の開発改良を行い、さらに東京・新宿に第二牧場を開設し、牛乳の販売所まで作ってしまう。この間、何度か政界入りの勧誘もあったようであるが、「野にあって国家に尽くす」と固辞したという逸話が残っている。

ところで、谷地頭の洋式牧場には二人の英国人が雇われていた。宮本ら（2002）は次のように記している。

1871（明治 4）年、広沢は牛の買い付けに来た英国人マキノンとその通訳ルセーに会い、話題が牧畜業経営まで発展したことが西洋式牧場設立のきっかけとなったといわれる。同年 10 月には旧八戸藩士族の太田広城とともに提出した西洋式牧場の開設願いが許可されると、マキノンとルセーを雇い入れ、4 名の共同経営で洋式牧場経営が始まる。牧場は欧米人との交流が増加したことで、日本人にも食肉が普及し始めたことから牛の飼育が目的となっていった。牧場経営は牛の放牧による繁殖のみでなく、飼料作物の栽培と組み合わせた混合農法であった（p.93）

そして、廣澤（2009）も次のように述べている。

明治五年五月十三日、ルセー、マキノン両者と、佐久起四郎・柴四郎らは勸農寮（農水省）より借り受けた洋牛（ショートホーン）二頭、綿牛（メンヨー）二頭、そして東京で買入れた洋種牛（ショートホーン）二頭、洋種牡牛一頭、耕馬牡三頭、耕牛十三頭、豚三頭を運ぶために、陸路八戸へ向けて出発した。（p.77）

二人の英国人のうち、マキノンは、生まれながらの農夫であり、日本語はわからず色々な職業に従事して特に牧夫として 3 ヶ国を巡り歩き、日本に来る直前、オーストラリアで 12 年の経験を積んだベテランであった。マキノンは「かつて駒場農学校農業現術生（のちの実科）の教師だったところ、外人教師連中の反目の結果、ペクペイという米人教師と共に札幌農学校にまわされた。しかし、そこでも折り合いが悪く」（金井,1992,p.37）その後開牧社の農夫となったが、彼がいたために牧場経営が成功した、といわれる（廣澤,2009,p.71）。一方、ルセーは、谷地頭に来る前は、越前（福井）藩で通訳などをした人物である。彼は「書生より身を起こし、学問もでき、越前藩に雇われた時は金二百円の月給取りであった。英語に和訳を加えて教授する人は当時少ないと云われていた。それゆえに至る所で先生と呼ばれ、その交際もこれに準じていた」（廣澤,2009,p.84）とある。筆者は、山下（1995）から、ルセーが谷地頭から東京大学の前身である大学南校で教鞭を執っていた米国人グリフィス（二人は以前、福井藩の洋学校に雇われた元同僚同士）に宛てた英文手紙がグリフィスの母校、米国ニュージャージー州にあるラトガース大学の図書館に保管されていることを知り、そのコピーを取り寄せてみた。¹手紙には、外国人の目から見た、当時の南部地方の冬場の気候や農家の暮らしぶり等が記されており、南部は Namboo, 八戸は Hachi no He, 煎餅は sembi, 青森は Awomori, 弘前は Shirazaki と綴られていた。

広沢らは、洋式牧場開設当初、基礎作りとして谷地頭の区画整理をし、牧草地・放牧場・畑の配置・牛馬舎の配置・住まいの配置を行い、また東京から種雄牛、岩手県久慈から雌牛を入れる等を行っている。そして 1873（明治 6）年、マキノンの指導により八戸の刀工に製作させた牛 6 頭曳プラウ（農機具開発については、本田（1992）、木村（2001）を参照のこと）で耕耘が開始され、また英国へ注文のプラウ 4 台他農具・種子が一年遅れで到着する（金井,1992）。しかし 1875（明治 8）年、開牧 3 年目になって、マキノンとルセーの仲たがいがひどくなり、ルセーは谷地頭を去ってしまう。本田（1992）によると、その後ルセーは箱館（現函館）の W・ブラキストンという人物を頼

っていき、その後南アフリカへ渡り、4000ヘクタールの農場を経営するようになったとのことである。一方、広沢牧場では、この年より牛耕を止めて馬耕専門にしたとのことである。また開牧4年目の1876（明治9）年には、明治天皇の東北巡幸に際して、広沢は三本木（現十和田市）で牛馬を天覧に供し、50円の賞金を賜った。随行の大久保利通は、わざわざ谷地頭まで足を運んで牧場を見学している。そしてマキノンとの契約が切れる満5年で、経営の基礎は一応築かれ、1877（明治10）年以降は馬の生産に重点を移し、盛んに洋種馬を導入して改良の実をあげたとのことである。また本田（1992）によると、マキノンは谷地頭を去った後、岩手県の外山牧場で馬耕技術・プラウ等を普及すべく努めたが、まもなく米国オレゴン州へ日本人妻ミヨと一人の少女ニトベ・タマを伴って渡ったとのことである。また、マキノンのご子孫メアリ・M・マキノン氏が1980年代に英語指導助手として青森県に赴任されていたことがあり、職務の間に広沢牧場を訪れたとのことである。²

3. 地域産業との関連性についての考察

『新編八戸市史通史編III近現代』（2014）には次のような記載がある。

歴史的な事象は、政治・経済・文化も含め年月や事項など目に見える形で記述される。しかし、事象の背後にはそれを行う人物がいる。事象の羅列だけで人物が見えない歴史は面白くないし、人物はその時代の精神を受け継いで生きている。（中略）そこには外来者である「風の人」と元々の住民であった「土の人」のコラボレーション（共同・協力）を垣間見ることができる。（p.67）

広沢安任が斗南藩少参事として藩臣・家族の救済に力を尽くしつつ青森県の誕生に深く関わっていたことは知っておくべきであるが、その一方で、二人の英国人を雇い入れた洋式牧場開設が、地域産業との関連性で考察すると、農業、特に牧畜・畜産業への影響が大きかった点も見逃してはならない。ここでは、谷地頭の洋式牧場における異文化との遭遇・接触と地域産業との関連性について論じる。蒲池（2020）は次のように述べている。

会津藩士とその家族はこの地を開墾し、食糧を確保するところから藩としての再スタートをきるのだが、それは失敗つづきの苦悶の歴史として記録されている。それもそのはず、寒冷であるうえ、濃厚な黒ボク地帯であるこの地でコメをつくることなど、武士たちの素人農業ではどだい無理な話。耐えかねた多くの藩士が青森を離れているが、家老に次ぐクラスの幹部だった広沢安任は牧場経営を藩経済の柱にすることを思いつき、実行に移している。試行錯誤の末、現在の青森県三沢市に日本初の西洋式牧場を開き、馬の歴史にひとつのエポックをしるした。（p.226）

明治時代の青森県畜産学校について研究してきた堀内（2023）も次のように記している。

明治政府は、1870（明治3）年の段階で、輸入した2頭の種牡馬を青森県南部地方に配布、民間レベルでも1872（明治5）年に、元斗南藩少参事広沢安任が谷地頭（現在の三沢市）に牧場を開設、すぐに種牡馬を輸入している。（p.26）

さらに東北農政局の「東北農業の歴史・歴史年表」でも東北地方の農業農村整備欄における明治時

代の出来事の筆頭に挙げられているのが、1873（明治6）年の欄の「広沢安任が現三沢市に洋式牧場を開く」であった（<https://www.maff.go.jp/tohoku/nouson/seibi/rekisi/nenpyo05.html>）。³

広沢牧場の経営が青森県に牧畜・畜産が産業として根付く契機の一つとなっていることは明白である。因みにマキノンは谷地頭を去った後、岩手の県営外山牧場に招聘されているが、森（1974）は以下のように記している。

マキノンはもと斗南藩の少参事だった広沢安任の経営していた広沢牧場に雇われていた農夫で、大農具の使用には特殊な技術をもっており、明治五年から広沢牧場に雇われ、刻苦精励する誠実な農夫であったことは広沢安任の著した「開牧五年紀事」で明らかであるが、明治十年すでに五十五歳に達していた。広沢は五年間の従業を多とし、親友である岩手県参事岡部綱紀に頼んで岩手県の馬耕技師としたものであった。彼は米国式・英国式の馬耕器を輸入し、勸業課に備付けて一覽に供し、申請あればこれを貸与して馬耕方法を教授し、（中略）技術の普及に努めた。（p.103）

谷地頭の洋式牧場で始まった西洋の知識・技術を牧畜・畜産業に根付かせる試みは、「風の人」と「土の人」（英国人と日本人、旧斗南藩士と旧南部藩農夫及び刀工）のコラボレーションから生み出されたものであるが、本県のみならず、他県にも、中央経由ではなく、直に伝えられていった点でも意義深い。

4. 地域産業に携わる人々への影響についての考察

ここでは異文化（二人の英国人）との遭遇・接触が地域産業に携わる人々に及ぼした影響について考察する。まず、マキノンから広沢安任自身への影響についてである。松本（1997）は以下のように述べている。

おそらく広沢安任は、このイギリスの農夫マキノンとの接触・会話・討論をとおして、国民国家とは何か、そこでの民主主義、議会制度とは何か、そうして資本主義とは何か、という近代の要諦を身をもって体得していったのである。かれにとって牧場経営は、文明開化の世から身を退いて野に隠れるなどといった処世ではなく、まさに近代国家の一員となることであった。

もちろん広沢も、はじめは旧会津藩士を救済するという意気込みがつよかったのだろうが、かれは次第に、その牧場経営をみごとにやりとげることが国民国家の国民としての務めなのだ、という意識に変わっていったとおもわれる。その変化は、福沢諭吉や渋沢栄一といった明治国家のイデオログたちとの交流以上に、このイギリスからきた牧畜技術者＝農夫との交流から獲得していったもののなかにちがいない。（p.185）

広沢自身、会津藩の藩校日新館から選抜されて江戸の最高学府昌平校で学んだり、幕府とロシアとの国際談判に正使に随行し直接交渉の機会を得たり、会津藩で公用人として要職を務めたり、斗南藩で少参事だったり、と様々な経験から近代国家の一員となるという意識の素地は形成されていたと考えられる。広沢の取り組みに関連して、後年首相になる原敬が郵便報知の記者として関東以北

を「周遊」し 1988（明治 14）年に明治天皇の二回目の東北巡行に特派員として谷地頭を訪問している。以下は本田（1992）が紹介している原敬の記事から抜粋したものである。

広沢安任君の牧場を觀んと欲し野辺地を發して行くこと五里余、樹木もなく、溪流もなく唯だ其強半は牧場にして馬群の徘徊するを見るまでなり。行人の艱苦想ふべし。倉内村に至れば農家も三四十戸あり、随て樹木も蓊蔚として真に村落の景情あり。是より姉沼の末流を渡り沼に沿ふて行くこと里ならず、忽ち見る数百の牧牛、群をなし徘徊するあり。是なん広沢君の牧牛なり。既にして谷地頭に達して広沢君を訪ふ。君の案内にて牧馬及び開墾地を見る。実に驚くべき偉業なり。（p.99）

さらに本田（1992）は、この時の原敬について次のように記している。

二四才の原敬の眼に、安任の事業は「実に驚くべき偉業」と映った。北東北に生をうけた身として、原は産業開発の原点をここに見た。原の感慨は、東北人は、いい素材を持っていながら、他の地方の人々と比較して、苦勞ばかりしている、という口惜しい思いである。だが、安任の仕事は二四才の原には眩しかった。これを思えば、青年には、静かに力が沸いてくる、ということであろう。（p.100）

異文化との遭遇・接触を含めた広沢牧場での「偉業」は当時の人々の心にプラス効果をもたらしたにちがいない。

次にマキノンとの関係において英国製農具が導入されたことについてである。金井（1992）によると、その導入時期は 1873（明治 6）年であり、それも発注から 1 年遅れで谷地頭に到着したといわれる。「この時期日本においては、民部省が米国出張の伊藤大蔵少輔に米国農具の購入を依頼したのが明治三年であり、一地方牧場がしかも民間の牧場が政府機関を通さずに、直接英国（イギリス商社）より購入していることは、大変貴重な出来事である」（p.40）。金井はこのことと関連して農具の製作・導入経緯について次のように述べている。

安任は、明治四年牧場創設の計画を立てるに及び札幌農学校にいたマキノンを迎え入れる。そして、明治五年に八戸にて農耕具・牛車等の製造を行い、同年十一月に横浜のイギリス商社に農具・種子を発注している。さらにその年の冬から春にかけて、馬車二輛・手車二台・鉄製プラウ一台・軋器一台・木製ハロー三台その他付属品を鍛冶屋三名・大工二名に造くらせている。これに携わった鍛冶屋に八戸藩御用刀工であった柏木源吉がいた。なお、翌六年四月に初めて牡牛八頭に右の鉄製プラウをつけて耕耘したと『開牧五紀事』に記されている。そして、同年十月十九日一年遅れてイギリス商社に発注していた農具・種子が到着した。（p.40）

このことから、異文化との遭遇・接触は、牧畜・畜産の当事者だけでなく、それに使用される道具を開発した地元の刀工の仕事・業務の変容に繋がったことがわかる。富岡（1991）は、柏木源吉（精光斎宗重）について以下のように記している。

文久年間、源吉（宗重）は八戸藩の御重役船越氏（窪町）を後見人として、刀鍛冶修業のため

に江戸に上る。(中略)江戸に於ける入門先は、固山備前介宗次の門弟で既に青山に於いて一家を成していた、精壮斎宗有(鈴木次郎宗久)のところであった。精壮斎宗有は鈴木姓を名乗り、九戸郡葛巻村の鍛冶集団の出身である。宗重とは遠縁の関係にあり、入門もその^{よしみ}誼によるものであろう。(中略)慶応元年春、めでたく修行を終え帰郷する(中略)。翌慶応二年、宗重は八戸藩主の命により再び上京し、精壮斎宗有の門弟として更に研鑽努力することになる。(中略)明治元年九月に八戸へ帰る。藩は苗字を鈴木姓より改姓させ禄を賜る(中略)。また、塩町に鍛冶屋舗を与える。(中略)明治三年十二月二十四日に庶人佩刀禁止令、同四年八月には、その他の廃刀も許可、同年七月十四日の「廃藩置県」の断行と、家禄支給停止という二重、三重の苦難に宗重も見舞われる。そのような時(明治五年)、斗南県少参事広沢安任が、三沢村在の谷地頭^{やちがしら}の原野に日本最初の洋式牧場を開牧する。横浜よりマシロン、ルセーの他、牧畜に長けたマキノンを雇い入れ、八戸の太田広城が必要な洋式農具の製作を宗重に依頼する。それによって宗重は、明治八、九年頃に谷地頭に移住したものと思われる。(p.12) ⁴

八戸最後の郷里刀工・精光斎宗重が、分野は異なるが、歴史の流れに翻弄されながら、異文化との遭遇・接触を起点として刀工の技術を西洋式農具製作に活かすコラボレーションが生まれていることに注目したい。なお、宗重については、八戸博物館発行『日本刀八戸市博物館収蔵資料選集』(2023)にも作った日本刀の写真を含めた紹介文が掲載されている。

最後にルセーと関連した、三八地区での出来事について触れてみたい。異文化との遭遇・接触は、八戸では、1875(明治5)年に番町に設置された夜学の開文学舎における教育の場で生じている。開文学舎は、蛇口伴蔵の子胤親^{たねちか}とともに藩中第一の洋学者といわれた岩泉正意^{まさのり}が設立した八戸初の洋学校である。岩泉自身は1870(慶応2)年に盛岡の日新堂に留学し、総監であった大島高任から英語、物理、化学などを学んだ経験があった(岩泉, 2007)。そして開文学舎では、谷地頭から講師として招かれたルセーが英学や西洋思想を説き、岩泉も語学・思想を開文学舎塾生とともに研究し(本田, 1988)、進歩的西洋思想や海外事情が伝えられたといわれる(渡部, 2021)。そしてこの学舎から、奈須川光宝^{なすがわみつとみ}、遠山景三、福田祐記、関春茂、成田芳雄らの民権運動の指導者が巣立ったといわれる(八戸市史編纂委員会, 2007)。開文学舎での教授や授業の実際は不明であるが、明治初期に英国人から直に西洋思想、海外事情等を学ぶという経験は、当時の八戸の若者たちにとって衝撃が大きかったと推察される。ところで、地域産業及び地域振興との関連づけという視点から、開文学舎で学んだ若者の「その後」について見ていくと、例えば、1913(大正2)年から1918(大正7)年まで八戸町長を務めた奈須川光宝は、長い間地域の悲願であった八戸の港づくりに関わったことがわかる。1915(大正4)年には発起人の一人となって漁港問題懇談会が開催され、1918(大正7)年には鮫湾漁港修築期成同盟会が結成されたことが、『新編八戸市史通史編Ⅲ近現代』(2014)に紹介されている(pp.125-7)。また関春茂は1891(明治21)年に県議に初当選し通算24年間務める間に、青森県尋常中学校八戸分校(現青森県立八戸高等学校)、青森県立第二高等女学校(現青森県立八戸東高等学校)の誘致を成し遂げるとともに、1923(大正12)年に八戸町長に就任後、1924(大正13)年の八戸大火の際には罹災者の救済に努め、八戸町再建に尽力したことが『新編八戸市史通史編Ⅲ近現代』(2014, pp.96-100)及び八戸市制作の「八戸市ゆかりの先人たち」サイト

<https://www.city.hachinohe.aomori.jp/soshikikarasagasu/shakaikyoikuka/bunka/1/5416.html> に紹介されている。これらは、近代黎明期に異文化との遭遇・接触を経験した三八地区の若者たちが地域社会を支える人材となって活躍した事例と解釈することができよう。

5. 終わりに

広沢安任や谷地頭の洋式牧場のことが日本史の中で大きくクローズアップされることはない。しかし、我が国の近代黎明期に、度重なる苦難に屈することなく、高い志を抱いてこの地に生きた広沢の足跡について学ぶことや、近代三八・上北地区における異文化との遭遇・接触を起点として生み出された地域産業等への波及効果について考察してみることは、意義深いことである。今の時代に、そしてこの地域に暮らす者であればこそ、郷土の歴史を見直して、「風の人」と「土の人」のコラボレーションから生み出されたパワー、そして先人の志、先見性、国際感覚、企業家精神（岩見, 2013）に触れることから、よりよい生き方へのヒント、発想が得られるかもしれないのである。

謝辞

本研究を行うに当たり資料提供に協力いただいた蛇口剛義氏, 和田正顕氏, 米国 Rutgers University 図書館 William Griffis Collection 担当 Fernanda Perrone 氏, 八戸市立図書館歴史資料グループ滝尻侑貴氏, 及び Mary Mac Kinnon 氏に謝意を表したい。

参考文献

- 1) 石光 真人：ある明治人の記録・会津人柴五郎の遺言, 中公新書, 1971.
- 2) 岩見 一郎：先人に学ぶ先見性, 国際感覚, そして企業家精神, 青森県立八戸北高等学校生徒会誌おらんど第 48 号, pp. 4-5, 2013.
- 3) 岩泉 正基：岩泉正意の英学ノートの英文原典について, 国立八戸工業高等専門学校地域文化研究センター・地域文化研究第 16 号, pp. 120-124, 2007.
- 4) 金井 忠夫：東日本における西洋農具の導入について(二)一東北地方中・北部を中心として一, 西那須野町郷土資料館紀要第 9 号, pp.19-58, 1992.
- 5) 蒲池 明弘：「馬」が動かした日本史, 文藝新書, 2020.
- 6) 木村 克彦：明治時代（三沢市）の農機具（プラウ）の材料学的解析について, きたとうほく産業遺産第 1 号, pp.41-53, 2001.
- 7) 富岡 昭：八戸刀鍛冶・精光斎宗重（上）－系譜と作品, 刀剣美術 12 月号, pp.10, 1991.
- 8) 八戸市史編纂委員会：新編八戸市史 近現代資料編Ⅰ, 2007.
- 9) 八戸市史編纂委員会：新編八戸市史 通史編Ⅲ 近現代, 2014.
- 10) 八戸市博物館：日本刀八戸市博物館収蔵資料選集, 2023.
- 11) 廣澤 安任：開牧五年紀事（上・下巻）, 斗南藩記念観光村先人記念館, 2000 復刻（1877 出版, 新編青森県叢書（2）, 歴史図書社に所収, 1973）
- 12) 廣澤 安正：活人劔, 活人農, 伊吉書院, 2009.
- 13) 堀内 孝：青森県畜産学校の明治 「富国強兵」は馬産地・三本木村に何をもたらしたか, 教育史料出版会, 2023.
- 14) 本田 敏雄：岩泉正意（1841－1909）と開文舎, 日本英学史学会報 No. 54, pp. 4-5, 1988

- 15) 本田 敏雄：旧斗南藩士広沢安任の牧場開設について～岩手の農機具・農業技術史研究に向けて～，岩手大学人文社会科学部・岩手の研究班（編），岩手文化の研究, pp. 86-107, 1992.
- 16) 本田 敏雄：北方日本の知的遺産（5）－広沢牧場の農機具・明治維新期の技術移転について，国立八戸工業高等専門学校地域文化研究センター・地域文化研究第6号, pp. 153-167, 1997.
- 17) 松本 健一：^{こうし} 犢^おを^{せいざん} 逐いて^い青山に入る 会津藩士・広沢安任，ベネッセコーポレーション, 1997.
- 18) 三浦 忠司：城下町南部八戸の歴史，伊吉書院, 2019.
- 19) 宮本 利行，北原 かな子，肥田野 豊，北原 晴男：青森県における士族授産と津軽藍産業化への試み，弘前大学教育学部紀要第87号, 2002.
- 20) 森 嘉兵衛：岩手近代百年史，熊谷印刷, 1974.
- 21) 山下 英一：グリフィスと日本―明治の精神を問いつづけた米国人ジャパノロジスト―，近代文藝社, 1995.
- 22) 渡辺 高明：続きたおうう人物伝 近現代の歩み，デーリー東北新聞社, 2021.

注1 筆者が Rutgers University からルセーがグリフィスに送った書簡のコピーを取り寄せた理由の一つは，山下（1995）の中に掲載された日本語訳を読んだ時，英語の原文で確認したい点があったからである。訳文には「人のことはこれくらいにして，今度は自分のことを少し。二ヵ月ほど前，八戸で投函した貴兄への最初の手紙で，蛇山散水という名の活動的な男のことを書きましたが，私に八戸で学校を始めてほしいといいました」（p.251）と記されていた。筆者は八戸で長く暮らす者として，人名の「蛇山」は「蛇口」ではないのかと直感し，原典で確認したいと思ったのである。実際，ルセー直筆の書簡には以下のように記されている（書簡の文字起こしは筆者による）。So much for the people. Now a little regarding myself. In my first to you; posted at Hachinohe, nearly 2 months ago, I mentioned an energetic man named Hebiguchi who wanted me to start a school at Hachinohe. また「散水」も「山水」が正しい表記であることを付け加えておく。なお同書簡のコピーは斗南藩記念観光村先人記念館に寄贈した（資料1，デーリー東北2012年4月2日）が，本田敏雄氏が同資料を既に同館に寄贈されていることを後で知った。資料1の本論への掲載については，デーリー東北新聞社より著作物使用許可をいただいている（2023年12月8日）。

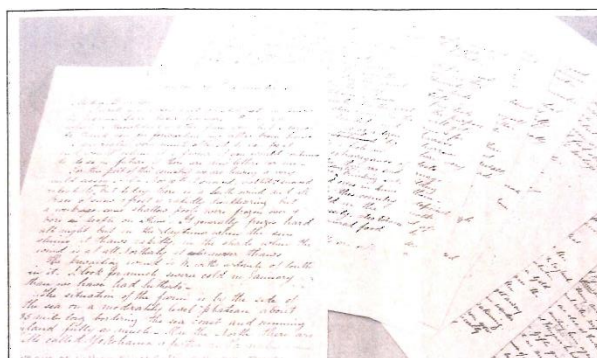
注2 筆者は，県立高校勤務時にメアリ氏が学校訪問したことがあるむつ市で中学校英語教員として勤務されていた方にこの件について問い合わせてみたが，期待した回答は得られなかった。その後，本学に勤務しネット検索した時にメアリ氏に関連すると思われるサイトを発見し，メールやり取りで，ご本人であることが確認できた。2021（令和3）年7月15日付けメールによると，メアリ氏は米国シカゴ在住で，日本へは1984（昭和59）年からJETプログラム開始前のMEF（Monbusho English Fellow）プログラムの一員として来日されたとのことである。氏からは三戸郡五戸中学校に訪問したことを伝える新聞記事（資料2，東奥日報1985年2月2日）のコピーをメールにて添付していただいた。なお資料2の本論への掲載については，東奥日报社より著作物使用の許可をいただいている（2023年12月8日）。

筆者はメアリ氏とのメールでのやりとりの中で，広沢牧場で働いていたマキノンが日本で出会った人々とのようにコミュニケーションを取ったのか尋ねてみた。メアリ氏からの回答は以下の通りである。I too wonder how Andrew MacKinnon communicated with the people he encountered in Japan. Perhaps like I did, with a smile and lots of gestures. (Mary Mac Kinnon, personal communication, 2021年7月21日) メアリ氏によると「自分と同じように，おそらく笑顔とジェスチャーで」ということであるが，近代黎明期に洋式牧場で畜産技術者としてマキノンの果たした役割のことを考えると，広沢安任との5年間に及ぶ協働の中での接触・会話・討論により深遠なコミュニケーションが図られていたと推察できる。

注3 広沢らによる洋式牧場の開設は1872（明治5）年が正しい表記である。

注4 「マシロン」は「マンシロ」が正しい表記であり，また，実際に谷地頭で雇い入れたのはルセーとマキノンの2名だった。

資料1 英国人ルセーの手紙コピー入手（デーリー東北新聞社提供、2012（平成24）年4月2日）



明治時代、三沢市に日本初の民間洋式牧場を開設した斗南藩士広沢安任の共同起業家で、英国人のアルフレッド・ルセーが140年前の明治時代初期、三沢から米国の友人に宛てた手紙のコピーを、青森県立六戸高校前教頭・岩見一郎さん（現八戸北高教頭）が入手し、3月31日、同市の先人記念館に寄贈した。手紙には三沢地方の冬場の気候や農家の暮らしなどが記されており、岩見さんは「外国人の目から見た貴重な資料。安任の先見の明ある業績も含め、この地域の歴史を多くの人に知ってほしい」と話している。

三沢市に日本初の民間洋式牧場を開設した斗南藩士広沢安任の共同起業家で、英国人のアルフレッド・ルセーが140年前の明治時代初期、三沢から米国の友人に宛てた手紙のコピーを、青森県立六戸高校前教頭・岩見一郎さん（現八戸北高教頭）が入手し、3月31日、同市の先人記念館に寄贈した。手紙には三沢地方の冬場の気候や農家の暮らしなどが記されており、岩見さんは「外国人の目から見た貴重な資料。安任の先見の明ある業績も含め、この地域の歴史を多くの人に知ってほしい」と話している。

三沢市に日本初の民間洋式牧場を開設した斗南藩士広沢安任の共同起業家で、英国人のアルフレッド・ルセーが140年前の明治時代初期、三沢から米国の友人に宛てた手紙のコピーを、青森県立六戸高校前教頭・岩見一郎さん（現八戸北高教頭）が入手し、3月31日、同市の先人記念館に寄贈した。手紙には三沢地方の冬場の気候や農家の暮らしなどが記されており、岩見さんは「外国人の目から見た貴重な資料。安任の先見の明ある業績も含め、この地域の歴史を多くの人に知ってほしい」と話している。

三沢市に日本初の民間洋式牧場を開設した斗南藩士広沢安任の共同起業家で、英国人のアルフレッド・ルセーが140年前の明治時代初期、三沢から米国の友人に宛てた手紙のコピーを、青森県立六戸高校前教頭・岩見一郎さん（現八戸北高教頭）が入手し、3月31日、同市の先人記念館に寄贈した。手紙には三沢地方の冬場の気候や農家の暮らしなどが記されており、岩見さんは「外国人の目から見た貴重な資料。安任の先見の明ある業績も含め、この地域の歴史を多くの人に知ってほしい」と話している。

広沢安任と民間洋式牧場開設

英国人ルセーの手紙コピー入手

明治の三沢知る資料に

明治時代、三沢市に日本初の民間洋式牧場を開設した斗南藩士広沢安任の共同起業家で、英国人のアルフレッド・ルセーが140年前の明治時代初期、三沢から米国の友人に宛てた手紙のコピーを、青森県立六戸高校前教頭・岩見一郎さん（現八戸北高教頭）が入手し、3月31日、同市の先人記念館に寄贈した。手紙には三沢地方の冬場の気候や農家の暮らしなどが記されており、岩見さんは「外国人の目から見た貴重な資料。安任の先見の明ある業績も含め、この地域の歴史を多くの人に知ってほしい」と話している。

（内沢浩）

六戸高前教頭 岩見さん 先人記念館に寄贈

もともと、東北の歴史や文化に興味があったという岩見さんは、2010年、六戸高校への赴任をきっかけに、安任の開拓をはじめとする土北地方の歴史への興味が強くなり、書籍などで調べるうちに手紙の存在を知った。

ルセーが三沢に来る前、福井藩の英語塾の教師をしていたころの教師仲間や、後に米国に帰郷後、日本学者と

アルフレッド・ルセーが、三沢から米国の友人ウィリアム・エリオット・グリフィスに宛てた手紙のコピー

して活動した友人ウィリアム・エリオット・グリフィスに宛てた手紙が、ニューヨーク州の大学図書館に収蔵されていることを突き止めた。岩見さんは、図書館に内容を知りたい旨の電子メールを送ったところ、図書館側が快諾し、コピーを郵送。3月23日に手元に届いた。

山下英一著「グリフィスと日本」に、この手紙の翻訳文が掲載されている。手紙は1872（明治5）年12月20日付。「南部から」の言葉で始まる手紙には、降雪と雪解けを繰り返す気候や農家の家の造り、冬季の農家の過ごし方、八戸市の鍛冶屋が牧場で使う西洋の農具を作っていたことや結婚式の風習などが、6頁にわたって詳述されている。

英語教師でもある岩見さんはこの手紙を「この地域に根差した土着性のある英文自体珍しく、いい教材にも



広沢安任とアルフレッド・ルセーの写真の前で先人記念館の森谷健司館長（右）に手紙のコピーを手渡す岩見一郎さん

なる」と評価。寄贈に「うなもので郷土の再発については「里帰りのよ」見につながる。この地

で発せられたもので、この地に返したかったと話し、特に若い人たちに知ってほしいとの願いを込めた。寄贈を受けた同記念館では「提供はありがたい。この手紙からさらに研究が広がる可能性がある」とし、まだ解説の済んでいない数千点の収蔵資料との接点に期待を寄せている。同記念館では今月下旬から始める予定の企画展の中で、この手紙を公開することを検討している。

